ものしりコーナー

（俳祖守武翁顕彰会　編集　「荒木田守武」より抜粋）

荒木田 守武【あらきだ もりたけ】

俳句といえばほとんどの方は松尾芭蕉を思い浮かべますが、芭蕉より150年前に俳諧（はいかい）の連歌（れんが）から俳句を独立させた人がいたのをご存知ですか？

五七五、七七と続ける連歌から五七五で俳諧の世界を作り、世界でもっとも短い文学としたのがこの人で「俳祖（はいそ）」といわれます。それを芸術的に高めたのが芭蕉で「俳聖（はいせい）」といわれます。

伊勢市宇治のおかげ横丁の近くで文明５年（1473年）に生まれた守武は、代々神宮の禰宜（ねぎ）をつとめる家柄で、15歳で禰宜となりました。守武は64年間も神宮に奉仕し、晩年の９年間は長官（一の禰宜）という最高位の神主になりました。

守武が53歳の時に一晩で「世中」という言葉をすべて入れた百首の歌を作り、世の人々に人の道はこうあるべきだと教えました。これが「世中百首」といわれるもので、江戸時代には「伊勢論語（ろんご）」として大切にされました。

『世中の親に孝ある人はただ何につけてもたのもしきかな』

この世の中で親に孝行している人は、すべてにつけて頼もしいものですよ。
（あなたは親に心配をかけてませんか。親に安心していただくのがまず孝行ですよ。）

450年も昔のこの教えの和歌は、おじいさんが孫に語るような、心打たれ、教えられ、反省させられる、時代を超えた教訓です。

荒木田守武は内宮宇治橋前の宇治神社にまつられています。

さのみ心に世をないとひそ
猶ふかくたづねば山のおくもなし

守武肖像（守武世中百首絵抄所収）